

やる気0のオリ主の疲労 アカデミア

ひなりむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

名前 雨宮 槐（あまみや えんじゅ）

個性 ??? 《感情操作， ???， ???》

自分の個性もわからないし、自分になりたいものもわからない。将来のためとか、わけわかんないし、正直なんとなくで雄英を受けた。

ずっと不思議だった。

ずっと知りたかった。

ずっと見えなかった。

ずっと会いたかった。

でも、別にいいや、忘れてるぐらいだし、そんな重要なことじゃない。

…… だから、この苦しいような胸の痛みも、刺さったままのこの喪失感も、いつか忘れて消えてくれるよね？

文才のなさに絶望しました！

ちよつと練習して来る！

すぐ戻るからっ！

目次

2 話	1 話	S t a r t
f a .	雄英入試	0 0 0 0 .
1		c
18	12	1

Start0000.c

昔は高いところが好きだった、気がする。

高いところに憧れてたし、高いところは楽しかったと思う。

でも、いつからか、空を見上げることはなくなった。

空に憧れることも無くなった。

憧れてた自分が馬鹿だったんだと思う。

わたしには、飛べる翼もなければ、飛びたいと思う心もないのだから。

```
#include<hiroaka.h>
```

```
#include<6112124141147124.h>
```

```
int main(void){
```

```
    soul zero;
```

```
    soul 0001[999], 0002[999], 0003[999], s [];
```

```
    start|world;
```

```
    name|fin|el zero;
```

```
    input|s 0001[999], 0002[999], 0003[999];
```


b b f f f f f f f f f f f f f f f
r r a a a a a a a a a a a a a a a a a
e e k k k k k k k k k k k k k k k k k
a a e e e e e e e e e e e e e e e e e
k k ; ; ; ; ; ; ; ; ; ; ; ; ; ; ; ; ;
;

{

```

r c s b b b b b b b b b b b
e o a r r r r r r r r r r r r
s m v e e e e e e e e e e e e
t m e a a a a a a a a a a a a
a a k k k k k k k k k k k k
r n s ; ; ; ; ; ; ; ; ; ;
t d || z
s | e e r
; n d o
  f (
  ( s
  a
  v
  e
  )
  ;
```


E E E E E E E E E E E E E E E E E E
R
R
O
R R

E	E	E	E	E
R	R	R	R	R
R	R	R	R	R
O	O	O	O	O
R	R	R	R	R

1話 雄英入試

雄英受けるのやめときや良かった。

フードを深くかぶり直し、あまみや えんじゆ雨宮 槐は今更ながら後悔する。

先ほどあつた小さなスタートの合図に一拍遅れて受験生たちは一斉に走り出した。

他の人よりも1秒でも早くロボットを倒すために走る。皆、自分のことしか考えていない。人に押されて何人か倒れそうになっている人も見える。無論その倒れそうになっている人にはわたしも含まれているわけだが。小柄なわたしは何度も倒れかけたがなんとか人の流れから抜け出すことができた

にしても、

みんな、やる気いっぱいみたいだな。

それに比べてわたしは、はあ……。

別にヒーローになりたいくないわけじゃない。なれるならなっておきたいと思っ
て。給料もうまくいけば高いらしいし、会社はめんどくさそう。

ただまあ、べつにここじゃなく富山にある実家の近くの高校にもヒーロー科はあつた

し、そこに行っておけばもつと楽だったのかなあ、なんて考えてみたり。もう、遅いんだけどね。

はあ、気が乗らない、

みんなずつと頑張つてロボットを倒してる。

落ちたら全部無駄になっちゃうのに

なんでそんなに頑張れるんだろ。

眩しいなあ。

でも、わたしもここで落ちるのはここまで来た意味がなくなっちゃうし、このぐらいならいいよね。

「疲れたし、もう動きたくない……」

相澤消太 s i d e

試験の様子をモニターで見守っていた相澤だが、もう試験終了まで2分を切ったというのに一向に動かない受験生を見つけた。

近年増加傾向にある『記念受験』というやつだろうか？

にしてもここまで全く動かないのなら真剣な受験生の邪魔だ。

気になった相澤は受験時に提出される受験生のプロフィールの書類の中からその受験生のものを探す。そして、相澤はその受験生の個性をみて眩く。

「もったいない」

個性 『感情操作（強）』

対象の感情を操り、行動に反映させることができる。ただ、自分の感情と別の感情に変えようとするとき著しく効果が弱くなる。

素晴らしい個性だと思う。

鍛えればヴィランをより安全に鎮圧することができるだろうし、救助した被害者・被災者を安心させることもできるようになるだろう。

だが、今回は相性が悪かったな。

そしてこいつは諦めたのだろう。

その個性でロボットを倒せるとは思わない。しかし、ヒーローは理不尽を超えていくものだ。

相性ごときでやる気を失い、足を止めるようならヒーローの資格はない。

そう判断し、相澤が他の受験生に目を向けようとした時。

その受験生がゆっくりと動き始める。

そして何かを呟いた瞬間。

試験会場Gの全ロボット・全カメラが停止した。

☆☆☆

教職員らは、会議室に集まり頭を悩ませていた。もちろん原因は試験会場Gのロボット全てを停止させたと思われる少女の採点についてだ。

「そもそも本当に彼女が止めたという確証はあるのか？」

その質問をしたのはブラドキングだった。ロボットの停止と同時にカメラまで停止してしまっただのだから。当然の疑問だろう。

「確証はないが、消去法だ。カメラからの映像が切れる瞬間の受験生全員の動きを確認してみたが、それらしい行動をとっているのは彼女だけだった。試験が終わるギリギリ

まで動かないのは非合理的だが、試験開始直後にやられていたら試験会場Gからの合格者は彼女だけになっていただろうな」

相澤はそう返し、「ただ——」とつなげるように言う。

「個性が『感情操作（強）』となっている。この（強）の部分が影響しているのかも知れないが、ロボットを止めることがこの個性だけでできるのかどうか。彼女が個性を偽っている可能性もある」

また、会議室が沈黙に包まれる。

それをみかねた根津校長が口を開く。

「僕は合格でいいと思うよ！ 雄英の特別合格制度を使えばいいのさ！ 倒した確証があれば主席合格なんだけどね！」

特別合格制度とは、『試験において教員が能力を図り切ることができなかった』もしくは、『試験結果が他の受験生たちの結果に大きな影響を与えた』受験生の為の制度である。

当然だろう。ほぼ確定とはいえ、彼女の得点そのものが彼女によるものなのかどうかはわからないのだ。その上で、彼女を合格にし、その分誰かを落とすのは賢明な判断ではない。

その後数分ほど話し合い、彼女は合格となった。

「では次の受験生についてですが——」
会議はまだまだ続いていく、

2話 f a. 1

わたし、雨宮 槐は個性を偽っている。

いや「偽っている」というと語弊があるだろう。

正確には、わたしは自分の個性がよくわかっていないのだ。

☆☆☆

4歳の時に個性が発現した。

『共心』という個性で、わたしが喜べば、みんなも嬉しくなる個性だと知って、とても嬉しかった。だから、わたしは笑っていいように思った。

わたしが笑えばみんなも笑ってくれる。そして、みんなが笑えばわたしも嬉しかった。

だから、小学三年生の時、借金を残してお父さんが家からいなくなっちゃった時も、お母さんの前で泣かないように我慢した。お母さん仕事を増やしてあまり会えなくなっても、笑って我慢した。お母さんに会えないのは寂しかったけど、お母さんは忙しそうだったし、そんなお母さんに甘えて迷惑をかけちゃいけないと思った。

小学五年生にの時、路地裏でお父さんに会った。お金がなくなってヴィランになっていたお父さんに何度も殴られた。

その後気がついたらわたしは暗い部屋に閉じ込められた。

でも、泣いちゃダメだった。

だって、お父さんはわたしを笑いながら殴っていたから。

わたしは泣いちゃダメだから。

わたしは悲しんじゃダメだから。

でも、閉じ込められて、何日か経った後、お父さんは部屋に来てくれなくなった。

そしてわからなくなった。

わたしが我慢すればいいはずなのに。

わたしが笑えばみんなも嬉しくなるはずなのに。

なんで、こんなに苦しいの？

なんで、こんなに痛いなの？

そっか、わたし、嬉しくないんだ。

みんなに笑ってほしくて個性まで使って、バカみたい。

もう、誰かのために笑うのはやめよう。

そう考えた瞬間、なにかわたしを縛っていたものがゆるくなったような気がした。

次に気がついた時、わたしは病院にいた。

ヒーローが助けてくれたらしい。お父さんのことを聞いてみると、わたしを助ける1日前に強盗で捕まっていたらしい。

調査でわたしの監禁が発覚し助けに来てくれたらしい。ヒーローからは「遅くなつてー」とか「こんな怪我をさせてしまつてー」とか言つてすごく謝られた。

わたしなんかにそんなに謝らなくていいのに。

わたしはちやんとわかつたから。

わたしは、みんなのために尽くすなんてことは元からむいてなかつたんだ。

わたしがみんなを笑わせているなんて思いあがっていただけなんだつて。

お母さんはわたしのために泣いてくれた。

話を聞けば、わたしが家に帰らなくなった日から、仕事を休んでずっと探してくれていたらしい。

お母さんのお兄さんが借金の分のお金を送ってくれたみたいで、退院した後は今まで、寂しくさせちゃった分も一緒に過ごそう、と言ってくれた。

そして、退院の日にあった身体検査で個性が変化していたことがわかった。『共心』は二年前ほどから自分の感情以外にさせることもできるようになっており、『感情操作』に変わった。そして入院中から気づいていたが、身体能力が約2倍になっていた。常時発動型個性であると思われたが、新しく個性が発現したとは思えず、医者からは今まで個性にロツクがかかっている状態だったのでないかとの診断を受けた。つまり、わたしの個性はもともと感情操作＋身体強化の効果のある個性だったのでないかというこ
とらしい。ただ、精神系の個性と強化系の個性の融合は前例がなく、『感情操作(強)』と
いう分かりにくい個性で登録されることになった。